

看護教育における OSCE 導入の現状と課題

—すでに導入している他大学を訪問して—

The issues on the introduction of OSCE to nursing education:

A report of the visit to the nursing universities that have already introduced OSCE

岸田 泰子 藤井智恵美
Yasuko Kishida Chiemi Fujii

キーワード：看護教育、OSCE、客観的臨床能力試験

key words: nursing education, OSCE, objective structured clinical examination

要旨

当学で OSCE を導入するにあたり、その理解を深め、事前準備のための情報を収集する目的で、文献による検討を行った後、すでに OSCE を導入している他大学を訪問した。札幌市立大学看護学部と京都大学医学部人間健康科学科看護学専攻における OSCE 導入に至るまでの準備や展開方法などの情報と文献検討によって得られた知見から、円滑な OSCE 運営の準備について検討した。

I はじめに

Objective Structured Clinical Examination (客観的臨床能力試験、以下 OSCE) は医学教育からはじまり、2001 年ごろから看護教育の中で用いられるようになった¹⁾。当学部のカリキュラムの中にも、「総合技術演習 (OSCE) I」、「総合技術演習 (OSCE) II」としてそれぞれ、3、4 年次の各論実習前後に配置し、学生らが学習した臨床能力を客観的に理解し、必要な学習に主体的に取り組むことを期待している。筆者らは、看護教育においてこの科目を初めて経験することになるのだが、その理解を深め、事前準備のための情報を収集する目的で、文献による検討を行い、その後、すでに OSCE を導入している他大学を訪問する機会を得たのでここに報告し、円滑な OSCE 運営の準備について考察する。

なお、本論文で報告する他大学の現状について

は、訪問時、口頭により、知り得た内容について公表する旨の許諾を得た。また本論文執筆後に全文を送り、面談担当者に内容を確認していただいた。

II 訪問した大学における OSCE の概要と特色

1. 札幌市立大学看護学部

この学部は「実践的に看護を学ぶ」ことを重要視し、カリキュラム構築がなされ、2006 年 4 月に開学した。大学教育の中で実践的に看護を学んだことの評価ツールとして、OSCE の導入が考えられたことから、開学と同時に運用された。看護教育が学年ごとのステップアップ方式の学修であることに着目し、1 年～4 年の各学年の到達目標を設定し、それを学生に提示した上で、OSCE によりその成果を検証するというものである。この大学での特色は OSCE により学生に点数付けを

受付日：2013 年 10 月 28 日

受理日：2014 年 1 月 21 日

共立女子大学 看護学部 母性看護学

したり、実習へ行ける、行けないと振り分けたりするのはなく、学生は自分ができたこと、できなかったことを確認し、自己学習を進めるツールとしている¹⁾ ことにある。また教員にとっては、自分の教育法の検討資料にするなど、教員を育てるツールでもある。

また札幌市立大学の強みは、開学と同時に学内の競争的資金を得て、「OSCE を用いた看護研究法の研究」、「模擬患者養成プログラムの開発」を開始し、その後、科学研究費を得て、「OSCE による卒業時看護技術到達度評価の研究」を実施するなど教育の実践と研究を並行して行ったことである。さらに継続することができた大きな要因は、2008 年度に文部科学省の助成事業である「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）」に採択されたことにある。OSCE を運用するための多大な資金を獲得され、特に OSCE 導入に不可欠ともいえる模擬患者を養成するプログラムまでも開発されるに至っている。

前述のごとく、札幌市立大学看護学部における OSCE は学内での演習科目や臨地実習で経験する技術を再学習する内容であり、学生が改めて学習するのではなく、現在修得している技術を発揮するものである。試験であっても単位取得科目でないため、学生は課外学習として自由参加である。学年ごとの実施内容は、1 年次が基礎看護学領域から 1～2 課題、2 年次は成人看護学領域から 2 課題、3 年次は成人、精神、小児、母性、在宅、老年看護学の 6 領域から各 1 課題が出され、そのうち 2 課題の試験を受ける。4 年次には地域看護学、看護管理学の 2 領域から 1 課題と、統合課題（基礎、成人、老年看護学）から 1 課題の計 2 課題に取り組む。自由参加であるので、1 年次はほとんどの学生が参加するが、徐々に参加学生数は減り、4 年次には 3 割程度とのことである。一方で、1 年次の OSCE から全領域の教員が準備、実施、評価プロセスに関わるため、教員にとっては専門外の実践・評価能力のスキルアップにもつながっている。

どの学年の OSCE も前日のリハーサルを経て、1 日かけて実施される。スケジュールは秒刻みで、まず受験生は時間内に課題を読み、内容を把握する（1 分）。1 分で複数回読みこなせるよう、課題は 200 字程度で作成されている。次に模擬患者に

対して課題を実施する（7 分）。その直後、模擬患者と評価者 2 名（教員）によりフィードバックを受ける（3 分 30 秒）。そして次のステーションへ移動する（30 秒）。学生が円滑に動けるように、他学科の教員との協働作業により、この秒刻みの時間を計測し、学生を誘導するための専用ソフトの開発もなされた。

毎年各領域が取り組む、課題、シナリオ作成はかなり大変な作業のようで、他領域の教員にも理解してもらえらる内容であるための工夫が凝らされる。各領域が作成し、最終的には教授会で決定される。

全領域の教員は、様々な役割分担（部門）に分かれて作業をする。たとえば、模擬患者担当部門では、一般市民から公募し、養成プログラムを受講して登録を終えた模擬患者との調整を行う。OSCE だけでなく、この模擬患者は演習科目にも活用しているため、年間を通じて連絡を取っている。

OSCE の実施にあたり、重要なことの 1 つに教員間の意思統一があげられる¹⁾。たとえば OSCE の意義を共有して認識していることである。札幌市立大学ではそのための一方法として、2 年間のトライアル期間に FD（faculty development）が実施され、すでに実施している機関への研修が積極的に行われた。

札幌市立大学が課題として挙げている点について記す。まず教育 GP により資金を得て 3 年間継続実施された結果、学年別の到達目標を修正する必要が生じてきた。また GP 終了後、それまで補助金によって確保されていたインストラクター（実習室に配置し、学生の自主学修を手助けする役割を担う）にかかる資金、新たな模擬患者の養成についての問題、カリキュラムと OSCE との関係の見直しなどの課題が浮上した。多少の規模の縮小はやむを得ないとし、継続の方向で検討していく²⁾ という。今後は基礎教育と臨床教育の一体化を目指した取り組みへの発展を模索されている。

2. 京都大学 医学部 人間健康科学科 看護学専攻

京都大学医学部人間健康科学科看護学専攻の中で、学部教育での助産選択コースは平成 22 年度

入学生をもって終了し、平成23年度からは大学院教育に移行した。今回、昨年度の学部4年生のうち助産選択コース6名に対する「OSCE リフレクション法」による教育内容について話を伺うことができた。この助産選択コースにおいてOSCEを導入することになったきっかけは、母性看護学・助産学領域の教員がアメリカで学んだラボラトリーシステムを採用したことによる。OSCEを取り入れた科目は助産技術論であり、助産実践能力の向上を目指している。

このコースにおけるOSCEの特徴は、学習教材として内田洋行製「PF NOTE」という機材を用い、学生のOSCE実施を映像として録画、リアルタイムに評価や気づきを映像にマーキングし、その後再生しながらリフレクションを行う点³⁾と、助産教育が学部教育から大学院教育への境目の期間であり、院生が在籍することから高度実践助産修士課程の(すでに分娩介助10例相当を終了している)院生10名の協力を得て教育体制を整えているところにある。

助産実習の前後で2回のOSCEを実施している。実習前の到達目標は、看護の基本的技術や対象者のニーズの充足、コミュニケーション能力、倫理的配慮に基づく人間関係をもつ、チーム力の育成などを目指している。課題は「陣痛間隔6分の経産婦が入院してきました。入院時の対応をしてください。」や「分娩第1期の初産婦が待機室にいます。(進行状態とビショップスコアを示した上で)ケアを行ってください。」のような一般的な分娩期のケアを実施させるものである。一方、分娩介助10例が終了した実習後の課題になると、分娩第1期、胎児心拍低下、分娩第4期子宮収縮不良、回旋異常、のような場面を設定し、助産診断とケアを展開する、のように実習前の到達目標に加え、リスクマネジメント、倫理的判断能力や高度な看護実践能力を確認する内容にグレードアップされている。6名の学生が2名ずつのペアとなり、3課題に取り組む。1課題の実施時間は10分で、院生が模擬患者(産婦)役やタイムキーパー、学生誘導を担う。実施後は教員2名、関わった院生とともに映像を見ながら評価を行う。実施した学生以外も映像を見ながら評価に加わり、気づいたことを直接その場で伝えるので、学生らは自分の助産診断をより客観的に振り

返ることができ、また自己の課題が明確になる。

OSCEを導入した経験を通して教員は、学生の看護実践、助産実践能力の向上、その成長が手に取るように実感できるし、学生も自分自身の成長を確認できている。学生の成長には個人差があり、卒業時の課題を多く抱える学生もいるが、それを自覚して臨床に出て行くことができる。OSCEの前に授業ではロールプレイ、シミュレーション学修という段階を経ているが、教員側にとってはそういった授業展開を再検討することにつながる機会となっている。また現在は少人数の学生を対象としているからこそリフレクション法を用いてじっくり取り組むことができているが、多数になった場合はこの方法の活用は困難だと感じている。また大学院教育に移行後の活用についてはこれから具体的検討を行う予定とのことだ。

Ⅲ OSCE実施のための準備

1. OSCE導入の目的と到達目標の設定

今回、すでにOSCEを導入している他大学を訪問し、文献からは得られない詳細な内容や経験談も聴取することができた。2校に共通して挙げられたことの1つは到達目標をいかに設定し、それに向けて準備を進めるか、という点である。これはOSCE導入の目的に関連することでもある。OSCEは医歯学系教育の中で臨床実習開始前の「共用試験」に採用され、導入が進んだという経緯があるが、看護教育の中でも、OSCEを卒業時の学習成果の統括的評価および現任教育につなげるための形成的評価として実施している大学もある⁴⁾。しかし、前述した札幌市立大学や京都大学では、OSCEにより学生が実習に行ける、行けないという技能判定のための試験ではなく、「実践的に看護を学ぶ」あるいは「看護、助産実践能力の向上」を目指した導入であり、教授方法の1つとしてOSCEを取り入れている。また報告した2校においても、OSCEを実施する時期(学年)は異なっているが、これは各大学によって様々であり⁵⁾、複数学年での活用もある。学年が異なれば、習熟する内容もおのずと異なる。当学においても3年次、4年次という複数学年において導入し、さらに全領域にわたる課題を設ける予定であるため、各時期、各領域において到達目標を明確に設定し、それを担当者全員が共有しながら準備を進

めなければならない。

2. 看護教育における OSCE の意義の共有

OSCE 実施にあたり、教員間で意思統一することの重要性は先に述べたとおりだが、共通の認識に加え、当学の場合、看護学部全領域の教員が参加して実践する予定であることから、各領域が互いの専門性や、特徴的な授業展開、技術演習をも理解し合うなどのプロセスも必要であろう。

看護教育における OSCE の意義については、多数挙げられている。まず教員にとっては全教員が関わることによるチームワーク力の向上に加え、個々の教員の教育力の向上である⁶⁾。OSCE の準備のみならず、領域を超えて様々なプロセスを経る中で、その実施自体が FD となるというわけだ。

学生にとっては、看護実践能力の修得^{7), 8)}、また修得に必要な学習方法を理解し応用すること^{4), 7), 9)}、主体的な学習姿勢の修得や学習意欲の向上^{7), 9), 10), 11)}、自己形成や自己の成熟^{4), 10), 12)}など、多くの利点がある。看護技術力の習得よりも看護判断能力やコミュニケーション能力などの自己の課題を見出すことにつながる効果のほうが大きいとの報告もある¹³⁾。

このような教員や学生への効果に加え、札幌市立大学の取り組みでは、地域住民による模擬患者を活用し、住民自らがその体験を重ねることにより、看護職の専門性への理解、病気や障害への理解、将来の看護を担う若者への理解につながっていること¹⁴⁾、先駆的に新しい教育方法を導入し、教育機関としてこの方法を共有することで看護界全体に対する啓発や貢献につながっていること¹⁵⁾など多くの波及効果が認められる。

以上のような OSCE 実施の意義を教員が共有できるような時間や場を設けることは最低限必要である。本報告がその一助となることにも期待したい。

3. 運営のための具体的準備内容

いかに OSCE を臨床現場に近いシチュエーションで実施するか、そのために必要とされることの中に、ステーション環境と課題シナリオ作りがある¹⁶⁾。高尾ら¹⁶⁾は、臨床現場に近づけるための物品の準備や評価視点の検討、模擬患者の標準化な

どは、OSCE の実施前に十分な時間をかけて準備する必要があると述べている。それに並行して主な準備内容として、① OSCE 実施内容の立案、② スタッフの確保、配置案作成、③ OSCE 課題の設定と評価表の作成、④ OSCE 実施要領の作成、⑤ 事前打ち合わせ、があり¹⁶⁾、当日の運営に至る。訪問した2校においても、これらの構想には相当な時間を費やしており、各年度初めから具体的準備に取り組んでいた。

また OSCE の特色の1つに模擬患者の活用がある。これについては時間も費用も要する問題が付随する。訪問校のうち、札幌市立大学はその養成を一般市民の協力を得て、自前で行っている。公立(市立)大学であり、市民の協力を得やすい立場にあることに加え、多大な資金を得て OSCE を運営できる環境であったことが模擬患者の養成を可能したと考えられる。模擬患者を活用することにより、学生は臨床のリアリティを疑似体験でき、感情をゆさぶられるというメリットがある¹¹⁾。一方、京都大学のように大学院生や、附属施設等の看護師等の協力を得て模擬患者や評価者を運用している大学も多い^{4), 12), 16)}。いずれも大学に関連するマンパワーという人的資源を有効に活用し、OSCE を運用している。実習施設のスタッフから協力を得ることは、その後の実習指導にも直接的につながるであろうし、評価を受ける学生にとっても、臨床現場のスタッフが参加することでリアリティが増し、一層、臨床を意識させる環境となることが予測できる。実際に、3年生の臨床実習前に OSCE を実施した大学で学生に行ったアンケートによれば、学生は学習成果の中で、看護師としても自己形成の助長にもつながったと実感したという¹²⁾。単に看護技術の修練というだけでなく、看護学生の内面の成熟を促すという効果が得られたことは非常に興味深い。当学には附属病院はなく、また大学院開設にも至っていないため、学内以外の人的資源には非常に限りがある。模擬患者を養成するにも相応の時間的余裕が見込めない。この場合、専門の業者等の利用により、すでに模擬患者として活動している人々の起用ということにならざるを得ないが、模擬患者を活用して教育効果を得るには、模擬患者と教員間の打ち合わせ、模擬患者のトレーニングにかかる時間も見込まねばならないし、かかる費用と教

育効果のバランスを考える必要がある¹¹⁾。カリキュラムが軌道に乗るまでの期間、教員や学生が患者役を演じるなどの措置を取ることにも一方法であろう。

IV OSCE 活用における課題

前述したように、OSCEにおいてはその準備の重要性は明らかであるが、運用においてはいくつかの困難さが報告されており^{4), 5), 11)}、課題として挙げられる点について、事前に解消あるいは緩和できるならばそれに配慮して取り組むことが望ましい。OSCE 導入の意義は多分にあることは理解できたが、課題もまた大きな問題として肝に銘じておくべきである。次に複数の課題の中から当学が直面しそうなものを取り上げて検討を加えたい。

まず1点目に、試験としてOSCEを用いる場合の問題点に、評価者の評価基準の不統一により、評価の信頼性、妥当性が得られないことがある。評価者間に差が生じることは、医学教育での導入で問題になっており、看護教育においても検討がされている¹⁷⁾。近藤ら¹⁷⁾は累積した数年間のデータによって評価者間の差異を検討しているが、この報告によれば、総合的には概ね公平であっても、課題別、あるいは年次によっては有意な差異がみられていた。この点に関しては、評価項目を具体的な行動レベルまで細分化することや標準模擬患者を利用することなどがその是正策として提案されており、参考にして考慮したい事柄である。また定期的に、評価者間の差異について点検する必要があるということがわかる。

2点目として、シナリオを複数設定する場合、それぞれの内容の質的均一性を保つことが必要ということである¹¹⁾。この点については札幌市立大学でも、シナリオ作りに苦慮されたことを重々伺った。領域の異なる教員が相互に学習し、意見交換をし合いながら作成には手間隙をかけたとのことだった。多忙な時間の中から、OSCEにかかる時間を捻出することは看護教員にとって至難の技でもあるが、前述のごとく、これらの作業が教員自身のFD活動にもつながることを意識して、領域の垣根を越えた議論をもつ時間を惜しまないことが必要だ。

3点目として、OSCEが臨床能力試験であるが

ゆえに、学生の不安¹⁸⁾や緊張^{8), 19), 20)}が高まり、十分な技能発揮ができない(あるいは発揮できないと感じる)ことがある。これに対して、緊張感を高めないように環境を整えること²⁰⁾が大切であろうが、「緊張」イコール「技能発揮できない」わけではなく、自己の技術に対する自信の影響も考えなければならない⁸⁾、また緊張しすぎることが自己の改善点であることに学生自身が振り返りで気づくこともあるという¹⁹⁾。学生が精神面での自己コントロールできる力をも養っていくこと、自らの特徴に気づくようなフィードバックのあり方、教員側は学生の特色を理解して、十分な配慮に基づく言動を行うことを念頭におきたい。

V おわりに

当学でOSCEを導入するにあたり、2校への訪問という貴重な機会を得て、事前にこの教育方法を学習することができた。OSCEには、学生に多側面にわたる学習成果と学生自身の改革という賜物を授ける魅力だけでなく、教員にとってもFD効果を上げるという大きなメリットがある。しかしOSCEから得られる本当の醍醐味は体験者でなければ味わえないだろうという感触が残っている。準備段階にあるわれわれには、これから様々な苦難が待ち構えているかもしれないが、教育を通して、学生と教員の相互作用により、学生とともに成長をとげたいと思う。

謝辞

多忙な中で時間を割いて、訪問に快く応じていただいた札幌市立大学看護学部学部長 樋之津淳子教授と山本勝則教授、京都大学医学部人間健康科学科看護学専攻の御担当者様、そしてこのような学習機会を与えていただいた当学の大関学部長に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 中村恵子：看護教育におけるOSCE, 中村恵子編著, 看護OSCE, メジカルフレンド社, 東京, 2-9, 2011.
- 2) 公立大学法人 札幌市立大学：学年別OSCEの到達度評価と教育方法の検討 平成22年度最終報告書, 10-11, 2010.
- 3) 中堀裕代, 谷口初美, 柳吉桂子, 他：OSCEリフレクション法から得られた助産学教育の課題, 母性衛生, 53(3), 318, 2012.
- 4) 滝下幸栄, 山本容子, 山縣恵美, 他：看護基礎教

- 育における OSCE の効果と課題——学士課程 4 年生への質問紙調査から——, 京都府立医科大学看護学科紀要, 22, 95-102, 2012.
- 5) 梶原理絵, 中西純子: 看護学士課程における OSCE 活用の現状と課題に関する文献検討, 愛媛県立医療技術大学紀要, 8 (1), 35-41, 2011.
 - 6) 守村洋: 全教員のチームワーク力の向上, 個々の教員の教育力の向上, 中村恵子編著, 看護 OSCE, メジカルフレンド社, 東京, 21-23, 2011.
 - 7) 佐藤公美子: 看護実践能力修得に必要な学習方法の理解と応用, 中村恵子編著, 看護 OSCE, メジカルフレンド社, 東京, 24-27, 2011.
 - 8) 高橋由紀, 浅川和美, 沼口知恵子, 他: 全領域の教員参加による OSCE 実施の評価 看護系大学生の認識から見た OSCE の意義, 茨城県立医療大学紀要, 14, 1-10, 2009.
 - 9) 庄村雅子, 佐藤幹代, 高橋奈津子, 他: 成人看護学における OSCE を活用した看護技術の主体的習得に関する学び, 東海大学健康科学部紀要, 14, 39-45, 2009.
 - 10) 山本容子, 山縣恵美, 滝下幸栄, 他: 看護学士課程 4 年生の看護実践能力の現状と看護基礎教育における OSCE の意義, 京都府立医科大学看護学科紀要, 21, 127-136, 2011.
 - 11) 本田多美枝, 上村朋子: 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実施に関する文献的考察——教育の特徴および効果, 課題に着目して——, 日本赤十字九州国際看護大学紀要, 7, 67-77, 2009.
 - 12) 笹本美佐, 小園由味恵, 奥村ゆかり, 他: 実習前 OSCE を通して看護学生が実感した学習成果, 日本赤十字広島看護大学紀要, 12, 79-87, 2012.
 - 13) 是澤あずさ, 河端恵美子, 渡辺聡美, 他: 母性看護学における実習前 OSCE による学習効果, 母性衛生, 53 (3), 317, 2012.
 - 14) 新納美美: 地域住民が模擬患者を体験することの意義, 中村恵子編著, 看護 OSCE, メジカルフレンド社, 東京, 28-31, 2011.
 - 15) 加藤登紀子: 教育方法の共有 (成果報告会), 中村恵子編著, 看護 OSCE, メジカルフレンド社, 東京, 32-35, 2011.
 - 16) 高尾憲司, 山本容子, 山縣恵美, 他: 学士課程 4 年生に対する OSCE 運営方法と今後の課題, 21, 145-150, 2011.
 - 17) 近藤智恵, 市村久美子, 伊藤香世子, 他: OSCE における教員間の評価の差異と課題, 茨城県立医療大学紀要, 16, 1-11, 2011.
 - 18) 川崎タミ, 横井郁子, 角田ますみ, 他: 実習直前の看護 OSCE (Objective Structured Clinical Examination) の結果を用いて測定した実践力と, 学生の心的状況の関連について, 東邦看護学会誌, 8, 10-16, 2011.
 - 19) 山海千保子, 浅川和美, 角智美: 看護学生が OSCE 実施時に経験する緊張の要因と影響 OSCE 実施時に経験する緊張の要因と影響, 茨城県立医療大学紀要, 15, 14-45, 2010.
 - 20) 大森真澄, 矢田昭子, 三瓶まり, 他: 試行的実践から明らかとなった看護学生に対する OSCE の意義と課題, 鳥根大学医学部紀要, 34, 59-64, 2011.